様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月１５日現在

機関番号：１３４０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０５３０８４６
研究課題名（和文）　現代的視点から自律的に歴史認識を発展させる小中一貫歴史カリキュラムの単元開発
研究課題名（英文）　The Development of History Curriculum, Covering Both Elementary School and Junior High School Level to Develop Autonomous Historical Cognition which Helps Students to Understand Modern Society
研究代表者
寺尾　健夫　（TERAO TAKEO）
福井大学・教育地域科学部・教授
研究者番号：70217412

研究成果の概要（和文）：
本研究では、歴史教育において従来から批判されてきた小学校と中学校における通史の繰り返し学習の問題の解決に焦点をあて、通史の単なる繰り返し学習ではなく、小学校と中学校を一貫して、現代社会の理解と結びつけて子どもに歴史認識を自立的、段階的に発展させる歴史カリキュラムの単元開発を行った。

研究成果の概要（英文）：
In Japan, History Education on the Elementary school and the Junior High School have been criticized for these thirty years, because History Education about the world history and Japanese history from the ancient time to the present time is similarly repeated both on Elementary School and Junior High School. And this unhopeful situation has not been changed even now. So on this Study, I intended to solve this crucial problem and have developed the New History Curriculum and the Series of Units which compose this History Curriculum. This New Curriculum can improve the student's (the children's) ability to understand the history autonomously and steadily stepping on several stages. These history understanding stages are created based on the theory of Constructivism on history.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学、教科教育学
キーワード：カリキュラム構成・開発

１．研究開始当初の背景

(1)歴史教育においては従来から、小学校と中学校における通史の繰り返し学習が批判されてきたという問題が存在してきた。
(2)上記の問題の解決のために、主題学習や文化圏学習、遡り学習などが試みられてきたが、一部の効果は認められたが、小学校、中学校別々の解決方法が採られ、小学校と中学校の歴史カリキュラムを一貫して捉え、通史学習の問題点を克服するような研究成果は得られていなかった。

２．研究の目的

本研究では、歴史教育において従来から批判されてきた小学校と中学校における通史の繰り返し学習の問題の解決に焦点を当て、通史の繰り返し学習ではなく、小学校と中学校を一貫して、現代社会の理解と結びつけて子どもに歴史認識を自律的、段階的に発展させる歴史カリキュラムの単元開発を目的としている。このような目的を設定したのは以下のような理由からである。

報告者は、後掲の「これまで受けた研究費とその成果等」に示しているように、これまで小・中学校の一貫性を明確にして歴史認識を発展させる歴史カリキュラムの開発研究を行ってきた。すなわち、まず 1980 年代後半から主として米国や英国で発展してきた構成主義の学習論に手がかりを求め、欧文文献や現地調査を通して歴史プロジェクトや歴史教育研究者の理論研究を行って社会構成（構築）主義の歴史学習の原理を明らかにした。これは、子どもの科学的な認識の発展を目ざすとともに、子どもの既有知識と学習の場で新しく提供される情報との相互作用や学習集団の相互交流によって子どもが自分自身で知識の構成や意味の構成を行わせることで子どもによる主体的な学習を実現する歴史学習の原理である。また、米国における現地調査（当時の研究者への聞き取り調査）や文献の分析によって、1960 年代から 1970 年代初頭においても構成主義の歴史学習と言える歴史学習プロジェクトが開発・実施されていたこと、それは認知構成主義に基づく歴史カリキュラムであったこと、そしてその基盤にある認知構成主義に基づくカリキュラムの原理や歴史学習の原理を明らかにした。

以上の研究に基づいて、（１）社会における人間関係と（２）歴史に関する問題、の２つの内容構成原理と、歴史人物学習、出来事学習、時代学習の３つの歴史学習のそれぞれに対応した学習原理を基盤とする小・中学校の一貫性を明確にして歴史認識を発展させる構成主義の歴史カリキュラムを開発し、このカリキュラムを具体化するいくつかの小・中学校歴史学習単元を開発・実施してその効果を実証的に明らかにした。

しかしながら、その後の構成主義の発展や歴史教育に対する要請の変化は目ざましく、次のような３つの新たなカリキュラム開発の課題が明らかとなってきた。すなわち第一の課題は、構成主義の理論の中身の変化とともに社会構築主義や歴史構築主義といった名称も使われながら、社会学や歴史学などを中心として紛争や葛藤、プライバシー、民族、ジェンダーなどの社会関係についての現代的な概念が再定義されて新たな概念が提出され、理論的発展を見せている（平英美・中河伸俊『新版・構築主義の社会学』世界思想社、2006；赤川学『構築主義を再構築する』頸草書房、2006；K.ガーゲン『社会構成主義の理論と実践』ナカニシヤ出版、2004）ことによってカリキュラムの内容上の変更が求められていることである。またこのような変化と平行して、各国における歴史教育研究もこのような現代的な内容を取り入れたものへと新たな展開を見せている。そのため、最新の研究動向の中で新たに生み出されている理論的成果を踏まえることで、これまで開発した歴史カリキュラムの内容構成原理や学習原理に新たな原理や下位の指標を追加し、新たに整備された歴史カリキュラムへと発展できることが明かとなってきた。第二の課題は、カリキュラムの全体像をより具体的で明確なものにすることである。これまでに開発した歴史カリキュラムを教育現場で実際に展開可能なものにするためには、教育実践の場にいる教師が容易に利用できるようなものになっている必要があるが、現在はなお単元事例の数が十分でなく，また単元の具体的な教材や指導方略が明確に示されておらず，小中学校の教師に活用しづらいものにとどまっていることが明らかになってきた。そのため今後は、カリキュラムを構成する具体的な単元の開発をさらに進めて領域毎の単元事例を増やし、カリキュラムが具体的な教育の場で子どもの自律的な歴史認識の段階的・系統的発展のために総合的に機能するものにする必要がある。

また、開発した多様な領域や問題を基軸にした単元を実際の教育の場で実施することによって、より多角的な視点からカリキュラムの有効性が実証でき、質の高いカリキュラムが開発できる。第三の課題は、国際化の進展とともに、各国では他国の歴史や歴史認識の在り方に対する理解を高める現代的要請が急速に高まってきており、これに応じて歴史カリキュラムの中でより拡充・発展させるべき内容領域の単元開発の課題が明らかになって

きたことである。例えば、最近の米国のクリント・イーストウッド監督制作の、第二次世界大戦末期の硫黄島の戦いを題材とした映画『硫黄島からの手紙』と『父親たちの星条旗』に対する人々の大きな反響は、日米双方の歴史認識のちがいに着目して国家間の紛争（戦争）における人々の歴史認識の在り方を再考する必要性を人々が示したものである。中国や韓国と日本の間にも同じ問題が存在しており、最近は国内の沖縄においても歴史認識の在り方の問題が提起されている。紛争や民族に関する構築（構成）主義の観点からの問題関心の高まりは、現在の社会や世界情勢とも関わりながら、米国ウィスコンシン大学の G. Scheurman 教授の戦争に関する歴史教育研究やスタンフォード大学の S. Wineburg 教授の紛争に関する社会文化的要素に着目した歴史認識研究、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学の P. Seixas 教授の、アメリカ先住民族などの多民族・多文化についての歴史認識を発展させる研究といった最近の研究でも明かである。申請者はこれらの研究者とこれまで交流を続けてきており、現在のこのような最新の研究の動向を把握しているとともに、今後は①紛争や交流などを通した我が国と関係のある歴史的事件や②少数民族の問題など、日本と共通する問題に焦点を当てた紛争や民族を視点とする歴史の認識をテーマとする単元を開発し、授業実践を通して両国の子どもの歴史認識の在り方を実験・実証的に研究する共同研究が可能なことを確認している。

以上のような課題に対応して、本研究では近年の新しい構築（構成）主義の理論および外国の歴史教育論を分析することで、新たに定義された紛争や民族などの、現代社会理解のための新しい視点を加えた歴史カリキュラムの構成原理や歴史授業の構成原理を明らかにするとともに、これに基づいて歴史カリキュラムの単元開発を行い、歴史教育実践の場での実証的検討を通して、現代的視点から子どもの自律的歴史認識を発展させる小中一貫歴史カリキュラムを完成させていく方法をとる。

より具体的には、本研究で新たに開発を目ざしている子どもが自律的に歴史認識を発展させる歴史カリキュラムと具体的な単元は、①科学の論理に重点をおいて出来事を解釈し、意味づけることで子どもが自分自身の歴史像を作っていく研究的歴史構築学習を基礎とし、その上に②批判の論理に重点をおいて出来事を解釈し、意味づけることで子どもが自分自身の歴史像を作っていく社会的歴史構築学習を展開する２タイプから成る２層の構造をもった歴史学習を実現するものである。また、取り上げる内容領域は人物の行為（指導者と意思決定）、政治（民主主義）、経済（公共政策）、外交、紛争（戦争）、憲法、思想、ジェンダー、民族、価値観の対立など、現代社会の理解につながる社会的見方・考え方を育成するものとする。

特に紛争や民族についての単元開発では、米国やカナダの研究者との共同研究を進めていく。そして、子ども達を動機づけ、自分の問題として歴史を追究する要素となる学習問題としては、①歴史の中の問題、②歴史を通した問題、③歴史の認知の問題を取り上げて単元の学習を構成しようとするものである。開発する歴史カリキュラムは現行の小中学校の歴史学習の中に組み込む方式をとり，この点で活用の容易さと現状の実質的改善を保障するものである。

本研究は、米国や英国での歴史教育の先進的研究の批判的検討を基にして、日本の現状に適合した、教育実践の場にいる教師が容易に利用できる新しい歴史カリキュラムを実験・実証的に作り上げるものである。現在大きな課題となっている小中の通史の繰り返しによる歴史学習の問題点を克服して、小学校と中学校を一貫して現代的視点から子どもに自律的に歴史認識を発展させるこのような歴史カリキュラムの開発は、我が国の歴史教育を改善、発展させる上で大きな意義があると考えられる。

３．研究の方法

本研究では、現代的視点から子どもの歴史認識を発展させる小中学校一貫歴史カリキュラムの単元開発を行うために、（１）理論的研究と（２）実験・実証的研究の両面からの研究を行った。

（１）の理論的研究ではこれまで開発してきた歴史カリキュラムの基盤としていた構築（構成）主義の理論に焦点を当て、近年新しく解明されてきた紛争や葛藤、プライバシー、民族、ジェンダーなどの社会関係についての新しく再定義されている概念の現代的、歴史的理解の特性と方法について明らかにした。さらに、この分野について世界的に先進的な研究が行われている米国やカナダの歴史教育研究者によって提案されている構築主義に基づく歴史教育理論を欧文文献や現地での調査研究を手がかりにして分析し、最新の構築主義の歴史カリキュラム論や授業構成論、学習論の新しい動向を解明する。そして、これまで開発した歴史カリキュラムに①さらに新し

い内容構成の原理や学習原理を取り入れて現代的視点からの社会的見方や考え方を獲得できものにするとともに、②小・中学校における通史の繰り返し学習ではない小・中学校を一貫して，特に現代的視点から子どもの自律的な歴史認識を発展させる歴史カリキュラムへとさらに発展させた。

また、歴史カリキュラムの内容系列としている人物の行為、(意思決定)、民主政治、公共経済、民主的外交、紛争（戦争)、憲法、思想、ジェンダー、民族などの概念について、学習原理となっている現代的歴史的問題による学習の構成に関わる要素（①歴史の中の問題、②歴史を越えた問題、③歴史の認知の問題）との組み合わせでできる学習単元の個々の事例を開発して、歴史カリキュラムを総合的なものとして仕上げた。特に、紛争（戦争）と民族の概念については国にまたがる問題として注目し、これまで申請者との研究交流を続け、歴史教育におけるこれら２つの現代的概念の教授方略に焦点を当てて研究を進めている米国ウィスコンシン大学およびカナダのブリティッシュ・コロンビア大学の歴史教育研究者との協同単元開発研究を行った。

（２）の実験・実証的研究では、（１）の理論的研究で開発した歴史学習単元の中で、①現代的視点からの歴史認識や②小・中学校を一貫した歴史認識の発展といった、開発した歴史カリキュラムの有効性を確かめる上での鍵となるいくつかの単元を、附属学校および公立小・中学校の教員の協力を得て実施し、子どもの学習の様相と照らし合わせて歴史カリキュラムおよび単元の有効性を検証した。そして、改善点を修正してより整備された歴史カリキュラムとして仕上げた。（１）の理論研究の一環として行う米国及びカナダの歴史研究者との共同単元開発研究では、実験・実証的研究として開発した単元を日米、カナダの学校で実施して実験・実証的授業を行い、世界共通の一般性と日本の固有性を併せ持った単元を開発した。

４．研究成果

（平成２０年度）

（１）平成２０年度の研究ではまず，歴史カリキュラムの新しい教育内容研究として，社会構築主義の社会学，歴史学などで新しく研究され，再定義されている紛争（戦争）や葛藤、プライバシー、民族、ジェンダーなどの現代社会理解の鍵となる概念に関する定義や理論を我が国で刊行されている文献や米国や英国で刊行されている文献を手がかりにして明らかにする。そして，これらの概念や理論を小中学校の子どもに，歴史認識や社会的な見方・考え方を育成する目的の達成に向けて，教育的観点から学習内容を選択，構成するための指標を明らかにした。

（２）次に、社会構築主義に基づく歴史理解について、特に史料テキストや映像資料を基にして、現代的課題である民族やジェンダー、紛争における学習者の社会・文化的背景を踏まえた歴史理解の構造を研究して歴史教育論を形成している米国スタンフォード大学の研究者 S. Wineburg とシンシナチ大学の K. Barton の論に焦点を当てて、彼らの提案している歴史カリキュラムの構成原理や授業構成原理を明らかにした。

（３）さらに、民主主義社会の基本概念の習得を中心目標とした歴史学習を実際に展開している社会構築主義の歴史カリキュラムの典型事例である米国の中等歴史カリキュラム「生きている歴史！」および歴史教育を含む初等社会科カリキュラム「生きている社会！」の最新バージョンの単元キットを収集、分析して社会構築主義に基づく歴史カリキュラムの構成原理および民主主義社会の概念を育成するための内容構成原理を明かにする。またこの二つの歴史カリキュラムは単元展開の際に教師自身が指導技能を高めることを不可欠の条件にしているので、それを可能にする具体的な単元展開の方法を分析し、教科書や史料教材などとの関連を踏まえた単元の実際的な指導原理についても明らかにした。

（平成２１年度）

（１）前年の平成２０年度の研究成果を踏まえ、現代的な視点から歴史理解を発展させるための歴史カリキュラム　の内容構成原理の解明を新たなカリキュラム事例の分析を通してさらに進める。この年度では史料分析と学級での歴史事象の批判的解釈に基づいて現代民主主義の原理の追究を目ざして子どもに自律的に歴史像を形成させる米国の中等歴史教育プロジェクトＤＢＱ（Data Based Questions）の教材キットを分析し、社会構築主義構成主義の歴史カリキュラムの構成原理と内容構成原理を明らかにした。また、このプロジェクトで採られている単元開発の具体的方法を明らかにし、本研究で作成を目ざす歴史カリキュラムの単元開発の方法的知見を得た。

（２）さらにこの平成２１年度では、前年度に研究した中等歴史カリキュラム「生きている歴史！」の開発元である米国のＴＣＩ（教師カリキュラム開発協会）を訪問して、具体的な単元開発や教材開発の方法を実地に調査し、カリキュラム開発の具体的・実際的方法

を解明する。またこの協会が開催している教師対象のワークショップに参加して単元指導の具体的・実際的方法を明らかにした（米国における調査研究)。

（３）社会構築主義に基づく歴史教育論のもうひとつのタイプとして特に批判的思考力の育成に焦点を当てたものがある。これはF. M. Newmannの思考育成の理論を基礎としたもので、認知構築主義と社会構築主義とを統合するものとしてウィスコンシン大学のG. Schurmanによって展開されている構築主義歴史教育論である。Schurman教授とは、特に国際紛争の民主的解決方法について学習する単元を開発し、日米双方で実施する実験・実証的共同研究を行った。

また同じく研究交流を続けているカナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学史認識研究センターのP. Seixas教授とは多民族・多文化理解についての単元開発を共同で行った。

（平成２２年度）

（１）平成２０年度と２１年度の研究で明らかにした構築主義の歴史カリキュラムの構成原理、内容構成原理および授業構成原理を基にして、小・中学校を一貫して、現代的視点から子どもの自律的な歴史認識を発展させる歴史カリキュラムの全体像を明らかにし、これを構成する小学校から中学校にわたる段階性と系統性を備えた単元と具体的な歴史授業の開発を行った。続いて、小学校、中学校の社会科教師の協力を得て、開発した単元の授業を実施し、結果の分析を通して単元の有効性を検討する。また、紛争や葛藤、プライバシー、民族、ジェンダーなどに関する単元の中から現代社会理解の上で特に重要な単元を選び、その実施と結果の検討を通して、開発した小中一貫歴史カリキュラム全体の有効性を検討した。

（平成２３年度）

（１）これまでの理論研究と実験・実証的研究の補充研究を行い、平成２０～２３年度の研究成果を基にこれまで開発した歴史カリキュラムを改善し、体系性と具体性を備えた小中一貫歴史カリキュラムにまとめた。平成２０～２３年の各年度では研究成果を学術誌や学会研究大会で発表し、日米の共同研究の成果については全米社会科協議会（NCSS）の研究大会で共同研究発表した。

なお、平成２１年度から２３年度にわたる研究の過程で得られた研究成果は社会科の学会および教育関係学会の研究発表大会で公開するとともに、学会誌などの学術誌で公開した。（次項の「５．主な発表論文等」を参照）

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 寺尾健夫、「出来事を社会的に読み解く力を育成する歴史授業」、『福井大学教育実践研究』、第33号、2008年、pp.41-52、査読有り。

② 寺尾健夫・野坂訓由、「小・中学校の連続性を踏まえた中学校歴史授業の開発」、『福井大学教育実践研究』、第34号、2010年、pp.43-54、査読有り。

③ 寺尾健夫、「学テで「総合的学力」を育てる」、『教育科学社会科教育』、620号、2010年、pp.9-10、査読無し。

④ 内平圭祐・寺尾健夫・門井直哉、「社会科・地理歴史科における教材開発の成果と作成過程」、『福井大学教育実践研究』、第36号、2012年、pp.99-110、査読有り。

〔学会発表〕（計２件）

① G. Scheurman & Takeo, Terao Hiroshima: An Inquiry Experience and Model, NCSS (National Council for the Social Studies) 89th Annual Conference 2009, November 14, 2009 , Atlanta, USA

② 寺尾健夫、「歴史の構築主義的教授法略－クリティカル・シンキング協会とブリティッシュ・コロンビア大学歴史認識研究センターの研究を手がかりとしてー」、全国社会科教育学会第60会全国研究大会自由研究発表、2011年10月9日、広島大学教育学部。

〔図書〕（計１件）

① 社会認識教育学会編『新社会科教育学ハンドブック』、明治図書、2012年、pp.135-142。

〔その他〕

ホームページ等

http://f-edu.u-fukui.ac.jp/~terao/Teraokentop.html

６．研究組織

(1)研究代表者

寺尾　健夫（TERAO TAKEO）

福井大学・教育地域科学部・教授

研究者番号：70217412